
約束の橋の上で

ゲーメアー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束の橋の上で

【Nコード】

N0131Z

【作者名】

ゲームアー

【あらすじ】

橋の上で約束を誓った少年少女四人。いつまでも一緒だと誓いあった彼ら達の前に、一人の少女が転入してきた。少女と関わっていくうちに、少年少女四人それぞれの日常は、少しずつ狂い始めていった……。

少年少女の約束

「やくそくだよ！ぼくたちはいつもいっしょだよ！」

「もしだれかがいなくなっても！こころはずっとずっといっしょだよ！」

「もしみんなばらばらになったらこのはしのうえでまちあわせだよ！」

「ぜったいだよ！やくそくだよ！」

夕日を背に、少年少女四人が橋の上に立っている。

少年少女四人は、それぞれの小指を一つに合わせて、橋の上での約束を誓った。

もし誰かがいなくなったとしたら、約束の橋の上で待ち合わせをしよう。

もし耐えがたい苦難が待ち受けていても、橋の上で皆を思い出して、その苦難を共用しよう。

もし四人が離れ離れになっても、橋の上での約束を忘れず、心でいつまでも繋がってしよう。

橋の上で誓いあった少年少女四人は、決してこの誓いを忘れはしなかった。

どんなことがあっても……。

天のお話：少女との出会い（前書き）

青く済みわたった空、見上げる少年は空が大好きだった。

いつもと変わらぬ空を見上げる、少年の変わらぬ日常。

しかし、たった一つの異変。小さな小さな一つの異変が、少年が見上げる空を変えていった。

空は何色に変わるの？赤？緑？黒？

その問いに、少年は答えを出そうとする。

少年が好きな、永遠に広がる空を見上げながら……。

天のお話：少女との出会い

月曜のよく晴れた日の空。空と言っても、晴天、快晴など、同じようでも言い方が色々ある。しかし、多少違えど空はどれも気持ちのいいものだ。

そんな考えが頭をよぎると、俺は歩くのを止めて空を見上げていた。

どこまでも広く続く青い空。どこまで歩いていっても、ここが地球である限り、空はどこまで行っても青い。

じゃあ地球の外はどうだろうか？

たくさんの星が光輝いている宇宙は、いったいどんな色をしているのだろうか。

そんなことを考えていると、小さな空間にいようとしている自分が急に馬鹿らしくなってきた。こんな広い青空を見上げる自分は、もっと自由にならなければいけないんじゃないか？

青空を見上げながら、俺は歩いてきた道を戻ることにした。

「どこ行くのかしら？」

「！！！！」

上を向いていた首を前に戻す。そこに立っていたのは、自分と同じくらいの少女だ。

「お前、空を見てみる。」

「は？何でよ？」

俺は少女と共に、再び空を見上げた。

「この青空をしてみる。これから小さな空間に縛られに行こうという気持ちなんか・・・無くなるだろ？」

言葉が終わると同時に、俺は少女を交わすように走った。元々、こいつにそんな説得なんか効果を持たない。あくまでも今のは気をそらすためだ。気をそらせれば逃げるのは容易だ。

・・・って、あれ？

「あんたまたそうやって学校サボるつもりでしょう！今日という今日は許さないわよ！」

猫を黙らせるかのように、俺の首根っこをガッチリとつかむ少女。「痛い痛い痛い痛い！離せ離せ離せ！離せて！離せて！翡翠！」

「いいから学校行くの！今日は絶対に離さないわよ！隆盛！」
そのまま首根っこを掴まれたまま、俺は小さな空間に縛られに行くのだった。

俺の名は銀河 隆盛

そして俺の首根っこを掴んでいるのが緑葉 翡翠

翡翠は幼馴染みで、幼稚園から今の中学二年生までずっと一緒だ。その時からか、翡翠は何かと俺を気にかけてくれている。まあ半分は暴力みたいなものだが……。

そんなこんなで今日も俺は、翡翠に無理矢理中学校につれていかれるのだった。

「授業とかやりたくないよぉ〜！」

強制的に連れて行かれた教室の机に突っ伏す。

「どうしたの？テンション低いよ〜？」

「おはよう、隆盛。今日は体調でも悪い……訳ではなさそうだね。」

俺の机の前に、少年と少女が二人ずつやって来た。

少女の方の名は奏 音子

そして少年の方は星原 光

どっちも、翡翠と同じく幼稚園からの幼馴染みだ。

俺が突っ伏しているのを見て、具合が悪いのかと疑問に思うのは付き合いの悪いやつだ。だから、俺を見てこんな反応するのは幼馴染みである三人だけだ。

特に俺は、広く浅く人と付き合う癖があるようだから、人にそれほど深くは追求しないし、追求もされない。

まあ何が言いたいかと言えば、俺のやることの意味を理解してくれるのは、幼馴染みである三人だけっていうことだ。

「よし！席につけー！」

先生が来たようだ。

学校に着いてから帰るまでの小さな束縛の時間は、昔から何も変わってはいない。いつも通りの朝、いつも通りの授業、いつも通りの昼、いつも通りの下校。何もかもがいつも通りだ。

しかし、いつもと変わらないと思っていた風景が、先生の最初の一言で変わった。

「今日は皆に転入生を紹介するぞ！」

朝の先生の一言は大体は聞き流されるものだが、今日は皆が聞き入っていた。

転入生の存在が先生によって告げられたと同時に、周りはざわめき始めた。

「転入生・・・ねえ。」

「興味ないの？隆盛。」

前の席にいた翡翠が聞いてきた。興味の有無とかじゃないのだが、何か気になってしまった。

「じゃあ紹介するぞ！入ってこい！」

ガラッ！

静まり返る教室に入ってきたのは、髪長い少女だった。

「天地あまち響月きよげつと言います。よろしく願います。」

ペコリと頭を下げる少女。まるでお人形のようなイメージだ。どこかのお嬢様だろうか？

「よし！じゃあ席は銀河の隣に行ってくれ。あの一番後ろの窓際の隣が空いてるだろ？」

そう言うと、少女はゆっくりと歩き出した。歩き方も品があると

いつか・・・清楚系お嬢様って感じかな？

「銀河・・・さん。よろしくお願いします。」

「え？ああこちらこそよろしく。わからないことがあったら聞いてくれな。」

丁寧な頭を下げられるのは初めてで、何だか萎縮してしまう。とりあえず精一杯の笑顔でかえしてあげた。

「よし！じゃあいつも通り授業やるぞ！」

転入生を迎える空気から一転、矢のように飛び交うブーイング。いつも通り、文句を言わずに俺はお飾りの勉強道具一式と文房具を出した。

しかし・・・。

「あれ・・・？消しゴムがない・・・。」

いつも筆箱に入っている消しゴムが、何故か今日が入っていないかった。

天のお話：謎の言葉

消しゴムが無い。そんなことは今の今までなかった。何故なら、俺の辞書に自宅学習なんて言葉はないからだ。家で筆箱を開けるなんて行為は間違ってもしないし、学校でもそんなに中身を取り出したりはしない。だから、筆箱の中身は万年変化なしで、今後もずっとそうなんだろうと思っていた。

とりあえず鞆の中を覗いてみたが、消しゴムらしき影は全く見当たらない。

落とした可能性もあるかと思い、周りをキョロキョロしていると前の席の翡翠が話しかけてきた。

「もう・・・いい加減に自分の消しゴム持つてきなさいよね。」

そう言うのと、前を向いて筆箱を漁り始めた。

「・・・あの、銀河さん。これ・・・。」

突如聞こえてきた声。新たに話しかけてきたのは、転入生の天地さんだった。まだ会ったばかりの人に消しゴムを貸してあげようなんて、優しい人だ。

「・・・隆盛、はいこれ」

「ありがとう、天地さん。」

天地さんの消しゴムを受け取ったと同時に、翡翠が振り向いて俺に消しゴムを差し出した。

「ああ間に合ったわ。すまんな翡翠。」

「そう・・・。」

そう言うのと、すぐさま前を向いて板書を始めた。

何だか冷たいな・・・いつもなら机に乗り出してまで突っかかってくるんだが・・・。何だか今日はいつもと違う朝だな・・・。

「・・・?」

ふと、俺はさっきの翡翠の言葉がよぎった。

” いい加減に自分の消しゴム持ってきてきなさいよね。”

いい加減につて・・・俺は毎日持ってきていたはずだ。なのにあいつは、ずっと持ってきてないみたいなのを言っていた。あいつは俺の筆箱の中が変わっていないことはわかっているはずなのに・・・。

まるで、持ってきてないことがいつも通りみたいな言い方だった。向こうにとってはいつも通りみたいだが、俺にとってはいつもと違う・・・。何で俺と翡翠の間に変なずれがあるんだ？

いや、ずれなんかじゃない・・・俺だけが置いてかれてるみたいだ。

わからない・・・自然と前のめりになって頭を抱える。

「・・・クスッ。」

「え？」

横から笑い声が聞こえた。笑ったのは天地さんだった。何で・・・笑ったんだ？まるですべてわかっているみたいなの笑い。もっと言うならば、母親みたいな笑いだ。

変な疑問が頭をよぎると、つい天地さんを正視してしまった。失礼かなと思つた瞬間

「・・・!？」

視界が・・・揺れた。

「今はまだ悩むのだ・・・無知なる少年よ。いずれ悩みに答えが見えたとき、汝、大いなる選択を迫られるだろう・・・。」

「ぐっ！」

急な激痛で、揺れていた視界が強制的に戻される。

自分でもわからないくらい、急な激痛。笑っていた天地さんを見た瞬間の出来事だった。

耳からではなく、頭に直接響いた謎の言葉。それが聞こえた瞬間に、急に激しい頭痛が襲ってきたのだ。

果たしてその言葉が、天地さんから発せられたものなのかはわからない。ただ、今横で俺を心配そうに見ている天地さんからは、あんな予言者じみた言葉は想像ができない。

そのまま俺は、椅子から崩れるように倒れた。「ちよつと！どうしたの隆盛！」

「だ！大丈夫ですか！？銀河さん！」

すぐさま天地さんが俺に駆け寄ってくる。

天地さんは背中をさすったり頭を撫でたりと、（多分）民間療法的介抱をしてくれた。まあ・・・それほど効果はないのだろうが、少しだけ楽にはなった。

「ありがとう天地さん・・・少しよくなったよ。」

「あの・・・どうなされたのですか？私を見るなり頭を押さえるなんて・・・。」

「やっぱりあれは天地さんではないのか？だとしたら、あれはいつたい何なんだろう。」

「まあ・・・どっちにしる変な予言が聞こえたなんて言えないよな。そんなこと言ったら天地さんがドン引きするだろう。」

「いや・・・ちよつと朝から・・・ははは。」

「全力の微笑みで返す。多分、かなり引きつってるかもしれないけど・・・。」

天のお話：汝と天

朝に起きた謎の頭痛は、退屈な授業にまで付きまとってきた。退屈な授業に加え、テンションが下がる頭痛。もはや拷問だ。

こんなことになる、決まって俺は授業をサボる。

だからと言って、屋上で惰眠を貪るなんて定番コースを歩むつもりはない。大体、今の時間に屋上にいるのは不良ぐらいのものだ。そんなのと絡むほど俺は馬鹿ではない。まあ絡まれても撃退は余裕なんだが……。

だから俺は、学校中のありとあらゆる場所を回ってきた。しかし、屋上以外の場所と言うものは中々くせ者だ。部室は鍵がかかっているで入れないし、特別教室は時間毎に使われている教室が違うので、時間毎に移動しなければならない。非常にめんどくさい。

かれこれ俺は、一階から四階まで全て回ってしまっていた。我ながらご苦労なことだ。

そんな俺が苦労の末たどり着いたのは、サボるにはうつつつけの隠れスポットだった。

「ふう……。」

ただ問題なのは、そこに行くまでが大変だと言うことだ。

そこにいくまでにかかる所要時間は三分弱。その三分弱の時間、俺は狭い空間を潜ってそこにたどり着く。

「相変わらず埃臭いな……ここ……。」

埃にまみれているこの部屋は、各部屋に太いパイプで繋がっている大きな部屋、”ボイラー室”だ。もちろん鍵を開ければ自由に入りはできるが、こんなところに来るのは業者の人ぐらいだ。

しかし俺は、とあるルートから忍び込むことに成功した。

埃臭いのを差し引けば、夏は涼しく冬は暖かい、座るところもあれば電気も通る。サボるにはうつつつけの空間だ。

俺はいつもの通り、持ってきた漫画を開いて寝そべった。

「……………！」

うっ！

「……………。」

う……寝そべってちよつと漫画を読んだだけなのに、急に睡魔が襲ってきた……。寝不足なんて今まで起きたことないのに……。しかも……。何故だかこの眠気は……。抑えられ……。な……。……い……。

……………。

「今はまだ悩むのだ……。無知なる少年よ。いずれ悩みに答えが見えたとき、汝、大いなる選択を迫られるだろう……。」

無知なる……少年？

「今はまだ悩むのだ……。無知なる少年よ。いずれ悩みに答えが見えたとき、汝、大いなる選択を迫られるだろう……。」

悩みに答えが……。見えたとき？

「今はまだ悩むのだ……。無知なる少年よ。いずれ悩みに答えが見えたとき、汝、大いなる選択を迫られるだろう……。」

大いなる……。選択？

「汝は天を見るもの、汝は天に魅せられしもの、汝は天を導きしもの、汝は天のせ」

汝？

「汝は天のせ」

せ？

「せ」

……………。

「うわあああ！」

何が起きたかわからない。気づいたら俺は叫び声をあげていた。

気づいたら俺は飛び起きていた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・。」

どうやら自分は寝てしまっていたようだ。しかし、体は完全に疲れきっている。肩で息をしながら、俺は何があったのかを回想してみた。

しかし、いくら思い出そうと頭を揺すってみても、思い出すには到底至らず、頭が痛むだけだ。

しかし、何故か頭に残っている言葉。

「汝は・・・せ・・・。」

よくわからない言葉が繰り返される世界。そこで聞いた言葉は、理解できない予言じみた言葉と、途中で途切れていた”せ”の言葉。

”せ”・・・ねえ・・・。」

全く思い浮かばない。”せ”が何を意味しているのかわからない。多分、その答えを解き明かす鍵は、同じく夢で繰り返された言葉、朝にも聞いた言葉。

「今はまだ悩むのだ・・・無知なる少年よ。いずれ悩みに答えが見えたとき、汝、大いなる選択を迫られるだろう・・・。」

無意識に口からでた、何故かはつきりと覚えてる言葉。俺はその言葉の意味を考えてみる。

まあ・・・だからと言って思い浮かぶものではない。やるだけ無駄、知恵の無駄遣いだ。

「やれやれ・・・。」

大体、こんな予言じみた言葉が何だっという話なんだ。それに、汝つてのが俺のことかっというのも微妙な話だ。なにかに選ばれしものじゃあるまいし、汝だとか予言だとか大いなる選択だとか。それこそ、さっきの話を”せ”って人がやるべきだ。

それにしても、あの予言は何なんだろうか。”大いなる選択”なんて壮大な話だ。そしてもう一つの言葉。

”天”・・・。」

！！！！！！！

「ぐっ！！！！」

天そらと言った瞬間に、頭に更なる激痛が走る。まるで、俺にその言葉ことばを深く印象づけるかのように……。

キンコーンカーンコーン！

「へ？」

鳴り響くチャイムの音。時計を見ると、四時間目の終わりを指していた。

「そんなに……寝てたのか。」

これ以上サボると翡翠に怒鳴られるな……。

俺は漫画を床に置いて、いつものルートを通って教室へと向かった。

天のお話：指輪と少年

「隆盛！寝癖ついてるわよ！」

「いや！こ、これは！俺は頭を使うと髪が逆立つ体质で！」

「そんなの・・・信じられるかあ！」

「ゴスツ！バキツ！グシャ！」

教室に帰ると、いつものように翡翠が殴りかかってきた。しかし、いつにも増して力が強いのは何でなんだろうか・・・。

「ほらほら！夫婦漫才やってないで早くお昼食べましょう！」

「そうだよ。ほらほら隆盛も翡翠も。」

音子と光によって、四つの机を並べた簡易テーブルに誘導される俺と翡翠。

そしていつも通り、俺は鞆から弁当箱を出した。

中を開けて食べようと箸を持つ。

「銀河さん・・・お弁当のおかず・・・お肉だけなんですか？」

「うわあ！」

急に後ろから話しかけられた。

「え？私・・・何かしましたか？そんなに驚かせて・・・。」

「あ・・・いや・・・気にしないでください。」

声をかけてきたのは天地さんだった。何で話しかけてきたんだろうと探ってみると、俺が今座ってる机・・・。

「あ！ごめん天地さん！」

「いえ・・・私は構いませんよ。」

慌てて立ち上がって席を譲る。それを見た翡翠が、閃いたように手を叩いた。

「そうだ！天地さんも一緒に食べようよ！」

翡翠が天地さんを席に誘導する。そして、ゆっくりと天地さんは席に座った。

「って！俺の席は!？」

「立ち食い。」
端的に言われた……。

「へえ、天地さんってクラシックに詳しいんだね。」
「クラシックだけじゃありませんよ。音楽はジャンルを問わず全て好きです。」

「じゃあ、ヘビメタの話とかも出来るの？」

「はい！今で言うところ……DOKとかかでしょうか？」

「あ！私もDOK大好き！」

「光さんはお好きですか？」

「僕が聞くのは天体観測中に聞く鈴虫の鳴き声ぐらいだから。」

「天体観測？」

「うん。一応僕、天文部の部長をやっているんだ。」

「今見える星って……どんなのですか？」

「夏から秋にかけての星か……何だったっけ？翡翠。」

「知らないわよ！」

他愛もない昼休みの会話だ。天地さんもすっかり三人と打ち解けてしまっている。

清楚系お嬢様と思っていた天地さんも、かなりの博学というかマニアというか……キャラが違うんじゃないのか？

「あら？銀河さんのそれ……。」

ふと天地さんは、俺の指に目をやった。

「ん？これ？」

天地さんが見ているのは、俺の指にはめられていた指輪だった。

「小三の頃、デザインを見て衝動買いしちゃったんだ。」

指輪には、太陽が刻まれている。そしてその太陽を取り囲むように刻まれている雲。この指輪に刻まれているのは、俺が大好きな空の形だ。

「全てを包む天……導かれしものたちの天……。」

指輪を見ながら、天地さんは小さく呟いた。

普段なら聞き逃してしまうような小さい声だが、何故か、この昼休みの喧騒に包まれた空間の中なのに、やけはつきりと聞こえた。

「あ……天地さん？」

ズキッ！

「うっ！」

また頭痛だ。言葉を印象づけるかのように響く頭痛。

天という言葉を聞いたたびに、それは頭に響いた。

「どうしたのですか？銀河さん。」

心配そうな顔で俺の顔を覗きこむ天地さん。

そうだ。朝の予言じみた言葉も、今の言葉も、天地さんから伝わったような感じだ。しかし、天地さんからは、言葉と同じような違和感……みたいなものを感じない。

「どうしたの？隆盛。」

「あ、いや！何でもない！」 まあ……深くは考えなくてもいいだろう、多分。

「ククククク……。」

！！！！！！！

「誰だ！？」

………

「銀河さん？銀河さん？」

「……えっ！？」

目の前では、天地さんがまた心配そうな表情で俺を覗きこんでいた。今……何が起きたんだ？確かに聞こえた笑い声。そして俺は振り向いたはず。

なのに、何ら変わってない。今までののは夢であったかのように。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

天地さんが複雑そうな顔で黙りこんだ。その表情は、何を考えているかがわからない。初めて見るような異質な表情。

「天地さんこそどうしたの？何か複雑そうな表情だけど。」一瞬、天地さんは驚いたような顔をした。が、すぐさま表情を暗くさせた。

「いえ・・・何でもないんです・・・。」

表情を暗くさせたまま、天地さんは黙りこんでしまった。

「ちよつと隆盛、天地さん落ち込ませてんじゃないわよ。」

「お！俺！？」

翡翠が俺に突っかかってくる。いやいや、俺のせいなのか？確かに直前まで話していたのは俺だが・・・。

ていうか何で俺が責められてるの？訳わからん！

刹那、天地さんが口を開いた。

「始まる・・・導きしもの・・・立ち向かうもの・・・天に選ばれしもの・・・。」

「え？」

まただ、また天地さんから予言者じみた言葉が・・・。

キンコーンカーンコーン！

チャイムの音が響いた。複雑そうな表情を崩さない天地さんを横目に、俺は自分の机に座った。

「午後の授業には・・・出た方がいいな。」

天のお話：少年の葛藤

結局、天地さんに対する違和感も、朝から響いている頭痛も、何一つ変わってない。変わらないまま、時間だけが過ぎていった。

キーンコーンカーンコーン！

「ああ〜！やっと終わった〜！」

午後の授業が終わり、小さな束縛の時間が終わりを迎えた。

「んじゃ、さっさと帰らせてもらっかな！光！」

「なに？」

近くに來た光を呼びつける。

「一緒に帰ろうぜ！」

「悪いけど今日はお金持ってきてないからな。それに今日は天文部の活動があるんだ。」

「ちえ〜・・・。」

天文部は不定期開催だから、まあしょうがないかな。翡翠は友達と勉強会やるらしいし、音子は追っかけのバンドのCDを買いに行っかなんかでもういない。「一人かよ・・・。」

俺の家は、駅を乗り継いで行くため、かなり遠い。そしてかなりの田舎だ。

まあ田舎と言っても、今俺が渡っている橋を境目に田舎と都会に分かれている。

そしてこの橋は、俺達幼馴染みが約束を交わした場所でもある。いつか離れ離れになったら、ここで待ち合わせしよう・・・。

まあ、幼稚園の頃の約束の話だし、俺は高校に入ったら自活しようと考えている。

結局、俺達はいつか分かれてしまう。だから、今会える時間だけ

でも大切にしたいと思う。

しかし……。

「部活やら勉強会やら追っかけやら……忙しい連中だな……。考えてみれば、なにもしていないのは俺だけだ。何だか手持ちぶさたな気持ちだ……。」

「……はあ。」

深くため息をついた。

しょうがない……今日も寄ってみるか……。

俺は、家に帰る道の途中にある路地を曲がって、目的地に向かった。

「誰もいないな……。」

静まり返った公園。この時間だったら、小学生が毎日騒ぎまくっているんだが、今日はそんな気配すらない。唯一聞こえるのは、風で多少揺れて聞こえるブランコの音くらいだ。

そんな俺の特等席は、滑り台についてる屋根の上だ。ここは、小学生在登れないように設計されているから、今の俺だったら造作もないことだ。

いつも通り、俺は屋根の上に仰向けになる。

「今日もきれいだな……。」

少しでも赤みがかった空は、見ているだけで吸い込まれてしまいそうだった。青い空は包み込むような優しさ、赤みがかった空は、飲み込まれそうな力強さがあった。

空には色々な顔がある。だからこそ俺は空が好きだ。

何か悩みがあったときや、悲しかったときは、俺はこうして空を眺めている。空を見ただけで、心のそこから安心できてしまう。

何か悩んでいることがあっても、広い空を見ているだけで自分の悩みがちっばけに思えてしまう。だからこうしていれば、悩みなんか忘れられる気がする。

しかし……。

「・・・くそ・・・何なんだよ・・・」

いつまでたつても、朝から続く違和感と心のモヤが取れない。広い空を見ていると、ちっぽけに感じない。

これじゃあまるで、悩みがこの空よりも広いみたいじゃないか・・・。

いつの間にか、俺は小さく震えていた。寒さなんかじゃない。しかし、俺はこの震えの原因を認めたくなかった。

これは・・・恐怖だ。飲み込まれそうな力強さを持つ空よりも広い悩み、全てを飲み込んで溶かし尽くしてしまうような恐怖だ。

俺が朝聞いたのは・・・果たして何なんだ？

天地さんに感じた違和感は何なんだ？

夢で見たあの言葉は何なんだ？

「・・・アアー！くそっ！」

イライラがどんどんと募っていく。行き場を無くした怒りは、次第に拳に集中してしまう。

「うっうっう！」

イライラは、いつの間にか”屋根を殴る”という形で現れてきた。しかし、発散されるどころか、殴るたびに手が痛くなるのが余計に腹立たしい。頭の痛みは多少は和らいだんだが・・・。

いつの間にか、体が張り裂けそうなくらいにイライラが成長していった。

「ああ！ダメだ！こんなときこそあそこだ！」

俺は屋根から飛び降りた。この程度なら怪我なんかしない。イラ

イラを引きずりながら、俺は公園を出ていった。

着いたのは、行きつけの本屋だ。

ここは住宅街にありながら、本の種類が豊富で入荷スピードも速い。田舎ながら、便利な本屋だ。

俺は学校帰りとか、今みたいな精神状態になると、決まってこの本屋で漫画を立ち読みしたり、青少年には影響が強いと思われる本

を買ったりする。

軽く財布の中身を確認したのち、俺は本屋に入っただった。

「……！」

本屋に入った直後、俺の目に留まったのは、俺と同じ制服の人間だった。

この地域に、自分と同じ学校の人がいるなんて知らなかった。俺は、遠目で誰かを確認してみた。

「あれは……天治^{てんぢ} 星也^{せいちや}」

天治 星也は、俺と同じクラスの男子生徒だ。控えめな男子で、地味さでは光と同じくらいな気がする男子だ。

「……ん？銀河……君？」

俺の存在に気づいた星也は、読んでいた本をしまって、ゆっくりと近づいてきた。

天のお話：少年と少女の思い出

「銀河君も・・・立ち読みに来たの？」

何でそんなことをわざわざ聞くんだ？本屋に来たら立ち読みは当たり前だろうが！

・・・おつといけない。イライラしてるからといって、星也に当たってはいけないな。

「まあ、そんなところかな。」

精一杯の笑顔で返す。

広く浅く付き合うには、即座に笑顔を作るのが得意にならないければならない。まあ俺のこれは生まれつきの才能みたいなものなんだがな。

一言二言交わすと、星也は再び本の世界に入ってしまった。負けじと俺も、周りを気にしながら、ヤバイ雰囲気の漂うのれんを潜ろうとした。

「りゅ・う・せ・い・く〜ん？」

「!!!!」

今まさにのれんを潜ろうとした時、突然後ろから優しく名前を呼ばれた。

「ハ！ハイ！」

俺はこの声に聞き覚えがある。いや、聞き覚えなんてレベルではない。馴染み深いといってもまだ足りないくらいの声だ。そしてこの声は、俺にとっては恐怖の対象でしかない。だから、何故だか声が自然と裏返ってしまう。

「あなた・・・何歳？」

「・・・14歳。」

「ここに入れるのは？」

「・・・18歳。」

恐る恐る振り向くと、笑顔一杯の少女がいた。もしこの笑顔を見

て恋に落ちたら、そいつは多分・・・マゾの中のマゾだ！

「わかればよろしい！」

首をガツシリと掴まれ、入り口に向かって引きずり回される。

「痛い痛い痛い！やめろって翡翠！」

「うるさい！いいから一緒に帰るわよ！」

乱暴者とはこいつのことを言う気がする・・・。

ゲシッ！

「痛！」

「今変なこと考えてたでしょ！」

蹴られた・・・しかも心の中まで読まれてしまった・・・。

「まったく・・・ん？」

俺を引っ張って入り口に向かう翡翠。しかしその途中で、翡翠は足を止めた。その視線の先には、星也が立っていた。

「星也君・・・だっけ？」

「翡翠さん・・・。」

お互いを見つめ合う二人。いや、よく見たら星也が一方的に見ている気がする。翡翠の表情から察するに、何で自分が見つめられているのかわからなくて見てるって感じた。

「あ、ごめんね星也君。読書の邪魔しちゃって。」

「あ・・・いや・・・。」

「あはははは、こいつが邪魔ばかりして本当にごめんね。今すぐ連れ帰るから！」

そのまま強引に俺を引っ張って本屋を出る。後を追うかのように続けて本屋から出てきた星也。

目が合った。

「・・・。」

よくわからないが、星也の目が何故だかくすんで見えた。

「星也君って・・・この辺に住んでたっけ？」

しばらく引きずられたあと、翡翠は俺に向かって聞いてきた。とりあえず俺は体制を立て直して、軽く制服の埃を払った。

「さあな。突然引越したのかもしれないぞ？」

まあ本人に聞いてみればわかるだろう。光にでも頼んでおくとするか……。

本屋から家に帰ろうとすると、さっきの公園を通らなければ帰れない。いつもなら賑わっている公園も、何故だか今日は静かだ。

俺達が遊んでいたのもこの公園だ。その頃からこの公園は、日が暮れるまでうるさいくらいに子供の声が響いている。

翡翠も公園を眺めている。

「いつまで経っても……この公園は変わらないよね。」

「え？」

「ん？どうしたの？」

翡翠が言った言葉が理解できない。

変わらない？この公園が？

俺達がずっと遊んでいた公園が？うるさいくらいに賑やかな公園が？

「何言ってるんだよ、翡翠。ここは俺達がずっと遊んでた公園だろ？」

「うん、そうだね。その頃からここ、静かだったよね。」

「はあ！？」

駄目だ！何かが違う！

「お前……俺をからかっているのか！？」

「え？何がよ？」

「ふざけるな！この公園が静かだったなんて……冗談にしては笑えないんだよ！」

募っていたイライラが爆発した。翡翠が訳がわからないという表

情で俺を見ている。

もはやどこからどこまでが演技なのか分からない！

「からかうんじゃないよ！質悪すぎるぞ！」

「からかつてなんかいないよ！隆盛こそ昔の思い出忘れたの？」

くそ！訳がわからねえ！

ズキッ！

「うう！」

理解できないことが多すぎて頭を抱えると、朝から続いていた頭痛がさらにひどくなった。思わず膝をついて荒く呼吸をする。

「隆盛！大丈夫！？」

翡翠が、俺の頭を撫でてくれる。朝、天地さんがやっていた民間療法的治療を真似しているのだろうか。

「ほら、落ち着いて……。」

ギュッと頭を抱いてくれる。意外と翡翠って包容力があるんだな……って意味が違うか。

そんなことを考えているうちに、頭痛が少しおさまってきた。

「ありがとう……翡翠。」

家に着いた。

「じゃあな翡翠。」

「うん、じゃあね。もう思い出を忘れちゃ駄目だよ？」

何だよそれ、まるで俺の記憶、俺の思い出が皆と違って見えていないか。

「なあ……翡翠。」

俺は翡翠を呼び止めて聞いてみた。

「橋の上での約束……翡翠は覚えてるか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0131z/>

約束の橋の上で

2011年12月10日02時45分発行